



# 北海道 国際理解教育研究協議会



# 会報 第65号



会長 池田 幸一



事務局長 後藤 宏



## 18年度 北海道国際理解教育研究大会

胆振・苫小牧大会

実行委員長 中村 恒司

(苫小牧市立光洋中学校長)

平成18年9月14・15日の二日間、苫小牧市で第27回北海道国際理解教育研究大会を全道各地から大勢の参加者をお迎えし、無事終了することができました。私たちにとっては、これからの大きな自信に繋がる大会でもありました。また、本研究大会のために文部科学省の新津様をはじめ、大勢のご来賓の皆様のご臨席を賜ると共に、道会長の池田様、事務局関係者など、ご支援をたくさん頂きました。ありがとうございました。

胆振の地での開催は、室蘭市に次いで3回目6年ぶり（紀要の挨拶での2回目は誤りです。）の全道研究大会でもあり、このような機会を与えて頂きましたことに改めて感謝する次第です。

さて、世の中は時代と共に著しく進歩し、世界は狭く宇宙まで飛び出し、情報は、瞬時に入手できる便利な時代を迎えています。しかし、相変わらず、人と人の争い事があり、自然環境



の破壊などがあり、危険で憂慮される状況がたくさん見られてきております。

そうした中で、学校教育においては、国際理解教育の充実が一層強く求められてきております。

胆振国際理解教育研究会は、そのことを踏まえて、時代の変化を読みとり、特に先輩たちが脈々と築き上げてきた8つの国際理解教育の基本目標を引き継ぎ、「児童生徒一人一人が、豊かな国際感覚を身につけ、広い視野から物事を判断し、足下から行動できる態度等を育成」するための研究を家庭や地域を巻き込み深めてきました。

こうしたことを基盤に本研究会は、北海道国際理解教育研究協議会第8次研究推進計画の研究主題に基づき、副主題「つながり、広がりを感じ、自ら課題を解決しようとする学びのあり方」を掲げ、

視点1 地球とのつながり、子供の行動を促す学習活動のあり方

視点2 コミュニケーション能力の基礎を育む小学校英語活動のあり方

視点3 子供一人一人が主体的に学習を深める評価のあり方

を定め、今年度は視点1・2を中心に身の丈にあった実践的な研究や調査を推進し、それぞれの発達段階を踏まえた幼稚園・小学校・中学校・高校までの授業づくりに努めてきました。また、苫小牧駒澤大学村井教授の積極的なご協力もあり「市民講座」も実現いたしました。

この後、本研究大会についての運営や各分科会、授業公開などの成果と課題について、実行委員会で話しあわれることになっており、来年の1月には研究集録を通してお知らせできると思っております。

終わりになりますが、本研究大会にあたりまして、ご尽力頂きましたたくさんの関係者の皆様に深謝申し上げながら、次年度の網走管内北見大会のご成功をお祈り申し上げます。ありがとうございました。

## 課題別分科会 第1分科会（中）

記録 苫小牧市立明德小学校  
教諭 紺野 喜美恵

第1提言者の札幌市立常盤中学の五十嵐 直幸先生からは「総合的な学習の時間における国際理解教育」と題して、昨年度1年間の活動、実践報告がなされた。主な活動内容としては、○JICA研修生の学校訪問 ○校外学習 ○学校祭での発表 ○フォトランゲージキットの活用が報告された。特に印象に残ったのは、地域のボランティア通訳の方々の多数の協力を得た生徒たちが、自分たちの身近な人たちに「こんなに多くの国際感覚を持った人たちがいるのか。」という実感である。また、「国際理解教育が何か特殊なものであるような誤解があり…、取り組みには腰が引けてしまうようです。」とした提案者の言葉から、学校全体での取り組みの難しさを感じた。



第2提言は音更町立下音更中学校の高橋 幸紀先生から「『世界を知り、自分を知ろう』をテーマとした国際理解教育の実践」と題してなされた。1年間を見通したカリキュラムが組めなかったために学級活動としてしか取り組めず、生き方指導の一貫としての国際理解教育とはならなかった。3時間だけでは自国への認識を持たせるのも難しかった。自分自身の視野も広がった。生徒とJICA研修生の交流が今も続いている。「課題としては今回の国際交流の授業での経験を他の領域にもどのように生かしていくか、カリキュラムへの位置づけである。」とした提言者の言葉が重かった。



第3提言は「世界を見て感じる国際理解教育の実践」～フィンランド研修への取り組みを通して～と題し、壮瞥町立久保内中学校の辻村 祐子先生よりなされた。壮瞥町の「中学生フィンランド国派遣」事業は、「ソウベツ・サンタ村」を町内に作りたい！そこでサンタ・クロース発祥の地であるフィンランドとの交流が生まれ、1993年5月ケミヤルヴィ市との友好都市宣言の調印に至った。研修に向けての事前、事後学習も含めフィンランドについての様々な学びがなされ、しかも現地へ行くことでそれを肌で感じる事ができたことは大きな成果であった。助言者の方からの第一声で「非常に恵まれた中学校ですね。」があったが、自治体が一丸となって国際感覚を身につけた中学生の育成に多くの予算を掛けて実施しているのは、羨ましいを通り越し妬ましくさえ感じたのは私だけだろうか？この貴重な体験をした中学生には、その経験をあらゆる場面でフルに活かした生き方を願いたい。また、参加した生徒の中にはホームステイ先の家族を通し、自分の家族を再認識した子もいたようだ。との提案者の言葉があったが、それが国際理解の＝他者（国）と触れ合うことで己（自分の国）を知る＝の最大の成果だと思った。

## テーマ 国際交流や国際協力を通じた国際理解教育の実践

記録 苫小牧市立拓勇小学校  
教諭 石尾 知子

### 1. 3校の実践の発表

3校の素晴らしい実践が発表されました。ビデオやパソコンの画面を通して、子供たちが生き生きと外国の方々と交流したり、活動したりする姿をみることができました。

#### ☆ 札幌市立川北小学校の発表

平成10年度から8年間もの間、国際理解教育として「JICA研修員との交流会」を行っています。最初の6年間で、子供たちは、外国人を意識することなく交流することができ、また、日本の文化や伝統と比較しながら、異文化を理解していこうとする姿勢もみられました。

さらに17年からは、開発途上国の抱える問題に理解を深め、国際理解協力の大切さを学ぶというJICA札幌の学校訪問プログラムの目的も加えて、研修員の国について事前に調べて発表したり、環境問題について調べ、研修員の国と比較しながら考え交流をしたりしています。このことにより、より外国を身近に感じ、様々な問題が現実味をおび、理解しようという意識が芽生えてきたとのことでした。



#### ☆ 江別町立大麻中学校の発表

(佐藤先生のお話の中で印象に残ったこと)佐藤先生は、JICA研修会で、実際カンボジアにいった時の話を生徒たちにしました。カンボジアの学校では、日本の中古の鍵盤ハーモニカ40台をみんな交代交代でホースを洗いながら、とても大切に使用しているそうです。その話を聞いた生徒たちは、自分たちの家にある鍵盤ハーモニカを集めて送ろうと全校に呼びかけ、送料も募金活動で集め、60台以上の鍵盤ハーモニカをカンボジアに送りました。

JICA研修員との交流は始まったばかりとの話でしたが、様々な体験活動を通して、生徒たちにより広い視野で世界に目をむけるきっかけを作りたいと考えている、と話されていました。



#### ☆ 苫小牧市立豊川小学校の発表

苫小牧駒沢大学の協力を得て、韓国の留学生を招いての交流、またALTの先生方、外部講師の先生を招いて、簡単な英語学習を取り入れた交流を行っているそうです。

以前、地域の老人クラブの方々に教えてもらった日本の昔遊び(けんだま、こま、あやとりなど)を通して、留学生と遊びながら、交流を深めるという活動をしています。あやとりをしている途中に、「アッサ!(やった!)」「モイッタ!(すごいね!)」などの韓国語を積極的に使っていました。留学生との交流を活発に行い交流がふかまっているようです。

### 2. 話し合いより

「他の先生方との温度差があり、全体の動きがそろわない・・・」「一人じゃできない・・・」「保護者とつながりは？」などの質問がだされました。特に、「学校全体のものになっていかない。続けていくには、どうしたらいいか。」という悩みが多かったです。

主事の先生からは、最初から大きいことではなく、小さい部分から広げていく。周りの先生をどんどんまきこんでいく。決して特別なものではない。最終目標は「生きる力」を培うことだ。という力強いご助言をいただきました。

## 外国語活動を通じたコミュニケーション能力を育む国際理解教育の実践

記録 苫小牧市立苫小牧西小学校

教諭 吉田 茂子

**討議の柱**～国際教育としての「英語活動」を進める上で指導計画、授業作りはどうあるべきか。

### 提言内容

札幌市立平岸小学校、福田栄喜先生より「英語活動と国際教育」というテーマで総合的な学習「英語活動」「国際理解授業」の実践と自校で開催した札幌国際理解教育研究会の研究大会の実践授業について提言がなされました。

北海道教育大学附属釧路中学校、森島克久先生より「小・中連携によるコミュニケーション能力の育成（Ⅱ）」というテーマでの一斉授業においてどの児童生徒も自信を持って他と関わる力が身に付く学習内容、学習形態の工夫、英語活動の中で身につけたい国際的な力について提言がなされました。

苫小牧市立清水小学校、一谷浩之先生より「小学校英語活動を取り入れるために」というテーマで提言がなされました。楽しい英語活動を通してコミュニケーション能力を身につけるために自校で実践している活動がビデオでも紹介されました。

### 質疑応答のようす

質疑応答では、ALTの方の感想や英語の授業への導入の仕方など具体的な質問がなされましたが、主に各地域の実践交流が行われました。

帯広市の小学校では、ALTの派遣の他にJICAの派遣、地域の人材も活用していることや子供たちが入学する中学校の英語の先生に授業に参加してもらっていることが報告されました。

網走管内からは、来年の全道大会に向けて十数名の先生方が本大会に参加しており、インターネットを活用して国際教育理解を深めるなど、いろいろな模索をしていることが報告されました。また、上湧別の開盛小学校では、英語活動を取り入れた国際理解協力を通して、子供たちがいろいろな同級生の違いをうまく受け入れることができるようになったことが紹介されました。

十勝管内では、ALTを活用した一般的な交流を行っているが、音更をはじめとして民間の力を招聘することが広がっている。鹿追町では、小中高の一貫教育を進めていて、「カナダ学」という名称で小学校では「カナダ入門」中学校では「カナダ基礎」高校では「カナダ研究」と英語を柱として一貫した研究を進めていることが紹介されました。

提言の先生方からは具体的な実践の様子やすぐに使えそうな資料が出され、大変勉強になりました。また、全道各地で積極的な取り組みをしている様子が紹介され、国際理解教育にかける先生方の情熱が伝わってきて大変有意義な分科会でした。



授業者： 苫小牧市立美園小学校 保木 千寿子  
ダンケン ポール ナイト  
内 容： 2年・生活科「もっと まちを しりたいね」

2年生の授業ではまず、身近な地域に住む外国の方との交流を振り返り、自分たちの生活と比べながら、似ている所と違う所を発表する活動が行われました。ALTのダンケン先生の問いかけにも子供たちは積極的に答えていました。普段使っている掲示物を教室に持ち込むこと

により、できるだけいつもと同じ環境を作り、子供たちが緊張せず活動できるよう工夫をしたそうです。

後半の英語活動では、ダンケン先生と一緒にゲームや歌で楽しそうに盛り上がる姿が印象的でした。その中でも特に、単語の発音がとても上手なことに驚きました。楽しんで英語を学んでいる様子が、子供たちの生き生きとした表情や動きからよく感じられました。

授業者： 苫小牧市立明野小学校 吉岡 ゆかり  
ショーン グレゼア  
内 容： 6年・総合的な学習の時間  
「It's a small world II ～music～」



6年生の授業ではまず、身近な動詞を使って相手に質問をするという英語活動が行われました。学級の友達だけでなく、参観していた先生方にも積極的に質問をし、会話のやりとりを楽しんでいる様子でした。

伝統音楽の発表の場面では、6年生らしく堂々と活動する姿が印象的でした。踊りやリズムを見ている側にも体験してもらうなど、発表の仕方もグループごとに工夫され、発表する側も見る側も、みんなが楽しそうに活動していました。また、説明のところどころには、ALTのショーン先生から教わったという英語表現が使われていました。子供たちの「英語を使って話したい」という意欲が伝わる授業でした。

授業別分科会には道内各地から約30名の参加があり、「自己を主体的に表現できる英語活動を組み立て、コミュニケーション能力を育成する授業はどうあるべきか。」「実践的な態度を身につけさせるための体験的な活動をどのようにしたらいいか。」という討議の柱に沿って、活発な意見交流がなされました。小学校の2つの授業については、どちらも子供たちが生き生きと楽しそうに活動しているところが素晴らしかったという感想が多く、英語嫌いを作らないためには、低・中・高学年の発達段階を踏まえて楽しく英語活動を行うこと、そして中学校との連携を深めることが大切なのだという意見が出されました。また、参加者の間では、英語活動を行う上での悩みや、それぞれの学校で実践している楽しい英語活動のアイデアなどが交流され、充実した分科会となりました。

## 第 27 回北海道国際理解研究大会・胆振苫小牧大会

授業・分科会：道徳

記 録 白老町立竹浦中学校

教 諭 吉 井 真 裕



### <授業の様子>

アメリカに渡って多内臓移植を待つ、生後 11 ヶ月の神達彩花ちゃんと、同じ病院で多内臓移植を待つ 1 歳 3 ヶ月のサーシャちゃんのドキュメンタリー番組を通して、生命の尊さについて考える授業でした。アメリカの病院で、日本人医師によって国籍や民族が異なる二つの命が平等に助けられる、国際理解の視点でも注目すべきものでした。

アメリカ人の赤ちゃんの脳死によってもたらされた臓器を、彩花ちゃんとサーシャちゃんのどちらに先に移植したら良いかの問いかけに「年齢が若いから彩花ちゃんに先に移植するべき」「彩花ちゃんの方が病気が重いから、彩花ちゃん」、「アメリカの病院で行われるから、サーシャちゃん」「どちらか決められないけど、成功する確立の高い方」などさまざまな意見が次から次へと生徒から出されました。授業者の横田先生は、その一つ一つの意見に耳を傾け、また同じような意見もとても大切に扱っていました。ほぼ全員の生徒が手を上げて自分の意見を発言しようとしていたのは圧巻でした。



結果的にほぼ同時期に二人は臓器提供を受けることができ、手術も成功したことがわかると、生徒一同ほっとした表情をしていました。「手術が成功した後の家族はどんな気持ちだったでしょう」との問いかけに、「彩花ちゃんの渡米のために募金活動を行ってくれたサポーターに感謝している」「医師に感謝している」「ドナーの家族に感謝している」などの意見が出され、多くの人々の支えによって二つの命が助けられたことを感じているようでした。授業が終了したあと、生徒たちがとてもいい表情をしていたのが印象的でした。

### <分科会の様子>

生徒たちがとても意欲的に自信を持って自分の考えを発表していたことから、横田先生の普段からの道徳の授業の積み重ねや、確かな学級経営が授業に現れていたことを挙げる先生方が数多くいました。また、この授業に先立って行われた 2 時間扱いの 1 時間目の授業も見たかったという意見も多数寄せられました。1 時間目の授業では、臓器移植に対する日米の考え方やシステムの違いを扱っており、日米の文化の違いを通しての国際理解の視点にたった道徳の授業への高い関心が感じられました。

議論の焦点の一つとして「臓器移植＝人の命をいただきます」ということを認識し、「臓器提供のドナーとなった二つの命」に着目することで、生命に対する考えがより深まったのではないかと、という意見が出されました。その方法として「自分の子どもの臓器の提供を申し出た親の気持ちはどのようなものだっただろうか」「もし自分が親だったら」という問いかけによって、生徒たちに葛藤の場面を設けることはどうだろうか、などなど活発な意見交流が行われました。

# 授業分科会 中学校 選択英語

記録 室蘭市立星蘭中学校  
教諭 猪股 俊哉

## 1 授業

- (1) 授業者 咲間博輝先生（苫小牧市立緑陵中学校）
- (2) 生徒 苫小牧市立緑陵中学校 中学3年生 選択英語コース 13名
- (3) 単元名 世界との架け橋 ～世界の国々とビデオレター～
- (4) 授業内容 アイダホの中学校へビデオレターを送る授業内容。すでに学校紹介のビデオは送っている。今回は、2回目にあたり、苫小牧の良さを紹介するビデオの台本作りに取り組んだ。
- (5) 授業の流れ
  - 1 コミュニケーション活動
  - 2 ピクチャーテリング
  - 3 苫小牧を紹介する台本作り
- (6) ポイント
  - 1 英語のライティングスキルを向上させる活動を多く取り入れる。
  - 2 仲間と協力して学習を進める。
  - 3 海外を身近に感じ、英語を使う喜びを感じる。



## 2 研究討議

- (1) 討議の柱
  - ・多用な方法で、地球や地域との結びつきを実感させ、ネットワークを築く授業はどうあるべきか。
  - ・自己を主体的に表現できる学習活動を組み立て、コミュニケーション能力を育成する授業はどうあるべきか。
- (2) 授業者からの授業の感想
  - ・コミュニケーション能力の育成のために、ライティングの指導が重要だと考える。
  - ・アイダホの学校にビデオを送ることで、世界を身近に感じ、英語への興味関心を高め、英語学習の意欲付けになった。
- (3) 参加者からでた意見
  - ・生徒の書いた英文の、誤文訂正のタイミングについて。
  - ・ライティングの指導には、ALTの活用も重要であること。
  - ・生徒たちが、相談・協力しながら紹介文を作っていたのがよかったこと。
  - ・中学の英語の授業では、基礎を定着させることが重要であること。
  - ・小学校および中学校との連携が今後求められること。
  - ・各地域の国際交流の紹介。
- (4) 助言者から講評（一部）
  - ・瀧澤義守 胆振教育局指導主事  
「書く」ことを中心にして、「読む」「聞く」が取り入れられていた点が良かった。「書いた」ものを表現し、発信することが課題となる。英語科の授業の中に国際理解教育の題材がある。日頃の情報交換を大切にすることで、小中高の連携につながる。
  - ・佐々木郁夫 苫駒市立開成中学校校長  
グループでの活動が、「共生教育」につながっていた点に意義がある。生徒たちは、学習した英語を駆使して、台本作りに励んでいた。今日の授業では基礎学習・補充学習になっていた。興味を引き出すため、多少難易度の高いタスクも必要だと思う。

# 平成18年度 派遣教員研修会及び 帰国教員報告会開催のご案内

毎年、北海道から在外教育施設（日本人学校や補習授業校）に15名程の先生方が派遣されています。そして毎年3月には、任期を終えられた先生方が帰国されています。北海道国際理解教育研究協議会では、その先生方の派遣研修会と帰国報告会を開催します。

今回は、平成18年の3月末に帰国された先生方による報告会を開催します。現地での文化の違いや生活面での苦勞、そして何よりも日本人学校や補習授業校での教育実践の報告をしていただきながら、研修と交流を行います。また、引き続いて平成19年度に派遣予定の先生方の研修会を行います。

この帰国報告会、研修会は、決して帰国者・派遣者だけの研修会ではありません。海外で暮らした先生方の生の声が聞ける機会ですので、在外教育施設への派遣を希望されている方、または海外の生活のことや教育のことについて興味・関心をもっている方々にも是非参加していただきたいと考えています。各地区でも同じような報告会や研修会が行われているところもありますが、全道から派遣された先生方が集まりますので、いろいろな地域の情報が聞ける機会でもあります。

実施要項は下記の通りです。この会報は全道の会員に配付されていますが、お知り合いの先生方にもお知らせ頂いてお誘い合わせの上ご参加いただければ幸いです。

## 記

### 平成18年度 派遣教員研修会及び帰国教員報告会

1. 主催 北海道国際理解教育研究協議会
2. 後援 北海道教育委員会
3. 対象者 平成19年度在外教育施設派遣教員  
平成18年度在外教育施設帰国教員  
北海道国際理解教育研究協議会会員及び派遣教員の家族  
海外日本人学校、補習授業校及び海外事情に興味・関心のある教員等
4. 日時 平成19年1月12日（金）  
13:00～17:00（18:00から激励会あり）
5. 場所 JICA札幌  
札幌市白石区本通16丁目南4-25 ☎011-866-8383
6. 日程

13:00                      13:45                      15:35                      17:00 18:00                      20:00

受 開 付 会 式	【全体会】 ・講話	【帰国報告会】 ・現地での実践 ・協議・質疑	【派遣地域別研修会】 ・現地での生活 ・協議・質疑	閉 会 式	【激励会】 ・挨拶 ・スピーチ
-----------------------	--------------	------------------------------	---------------------------------	-------------	-----------------------

12:30 13:15

17:20

※18年3月に帰国された教員並びに19年度派遣教員の皆さんへの報告会・研修会参加のご案内と出席依頼については、後日改めて各地区の会長を通じて連絡をいたします。是非ご参加くださいますようお願いいたします。

不明な点やご質問などがありましたら、道事務局担当の事務局次長白石まで連絡を下さい。  
道事務局次長 白石 邦彦（札幌市立清田小学校校長）  
電話 011-881-2852  
FAX 011-881-6596



# い・ご フォーラム

苦小牧を舞台にして、全道の仲間が集い「第 27 回胆振・苦小牧大会」を成功裡に終わることができた。これも胆振地区のみなさんの心の行き届いた準備のおかげとまず感謝したい。

さて、昨年 8 月に、文科省から「国際教育に関する報告書」が出されるなど、国際理解教育に関して新たな展開を求められている。特に、この報告書でも述べられているように、「国際教育」とあえて「理解」を取ったところに注目しなければならない。本会においても、地球市民として子供たちを育てて行く中で、その地球に対する思いを、自分の住む地域の中でどう行動化させていくかを研究してきた。このように、これからの教育では、理解をどう行動化していくかが問われているといえる。

国際理解教育を「国際理解教育は中抜けの教育だ。」と批判する人々がいる。私たちが、「地球市民」を目指して子供を育てると主張しながら、実際の授業では、地球の様々な状況を理解させるだけにとどまり、その解決にむけての姿を提案できなかったことに起因しているのかもしれない。

この夏、「よのなか」科の実践を通して教育改革に具体的な提案を行い、平成 15 年からは、初の東京都の民間人校長として活躍中の藤原和弘氏のワークショップに参加する機会を得た。この中で、何度も、これからの社会に生きる子供たちに「正解」を押し付ける教育では「生きる力」は付かない。子供たちの住む「よのなか」を教材化し、外部の人・者・情報とネットワークすることが必要だと主張していた。どう具体的に地域とかかわらせるか、そして子供たちを地域とつながらせていくかが課題だというのだ。

我々が大切にしている言葉に「THINK GLOBALLY ACT LOCALLY」がある。もう一度、この原点に立ち返り、この視点から子供たちの学びを組織し直すことがますます必要となる。

## 図 書 紹 介

「日本の英語教育に必要なこと」

小学校英語と英語教育政策  
(慶応義塾大学出版会)

著者 大津 由紀雄 編書  
1948年 東京生まれ  
慶応義塾大学言語文化研究所所長  
言語獲得について研究

文科省の大臣が、就任の挨拶で「小学校に英語はいらない」と発言するなど、相変わらず「小学校の英語活動」にむけての方針は定まらないようである。しかし、「文科省が、必修化にむけて音声教材を無償配布」という報道がなされるなど、小学校の中で「5、6年生で英語を指導する」という事態は避けられないようである。しかし、どう教えたらいいのかという指導技術に目を向けすぎ、「なぜ学校で英語を教えるのか」という導入の目的をはっきりさせないまま、必修化の事態を受け入れることに不安を覚えているのは私だろうか。

著者は、認知心理学者として英語教育にかかわりながら、この「小学校における英語教育」について真摯に取り組んできた。その足跡は「小学校での英語教育は必要か」「小学校での英語教育は必要ない」に残されている。この本は、この第三弾としてあえて、導入を前提として捕らえ、英語教育の理念・目的を整理しながらその方向性について述べている。

著者が述べているように、英語教育を言語教育として母語教育の一環として捉えなおし、日本語の運用能力の基礎を築く方法として捉えることは我々に有益な示唆を与えてくれる。特に、「英語を教えるのではなく、英語を通して地球市民を育てたい」という願いをもっている私たちにとっては、その支えとなる本だと考える。小学校英語について考えを整理したいと人には必読の書である。